# 遺跡から何を掘り出すのか？

まほろん館長　**石川 日出志**

【導入】　考古学者は、遺跡から何を掘り出しているのでしょうか？　土器、土偶、埴輪、住居跡、古墳・・・。しかし、この答えでは、間違いではないけれど、正解とは言えません。

　では、発掘品と骨董品との違いは何でしょうか？　じつはこの違いが重要なのです。土の中から掘り出された資料には、それが遺跡の中にあった状態に関する様々な「情報」が伴っています。こうした「遺跡の中での情報」こそが、掘り出しただけでは単にモノでしかないものを、過去の人類の姿を復原するための歴史資料にするのにとても重要なのです。いろんな遺物や遺構が土中に埋もれた状態の情報を丁寧に掘り出し、それを図面や写真などで細かく記録するのが発掘なのです。

## １．考古学とは？

（１）考古学における歴史復元は、考古学的事実に基づいて行われる。
　その考古学的事実は，遺物・遺構・遺跡に存し，それらは主に発掘調査によって得られる。

（２）遺物・遺構・遺跡とは　　【１】
・遺物：　発見された場を離れてもその基本的性質を失わないもの。土器・石器など。
・遺構：　発見された場を離れるとその基本的性質を失うもの。住居跡・墓など。
・遺跡：　遺物や遺構が存在する場。

（３）発掘資料と骨董品の違い
・発掘資料には、遺跡の中の情報がともなう。

## ２．発掘されたモノを歴史資料にする方法

＊歴史学では、５Ｗ１Ｈ（いつ when、どこで where、だれが who、何を what、なぜ why、どのように how）を確かめ、問う。

＊＊考古資料を歴史資料にするには、５Ｗ１Ｈのうち、いつ when＝時間、どこで where＝空間、だれが who＝名前、を定める必要がある。

### （１）いつ？：　時間を定める＝遺跡に残された時間情報

#### ①．同時に遺跡に残されたもの＝「一括遺物」　　【１】

ａ：一緒にそこに残されたことが明らかなもの＝その時点の同時性

ｂ：古いものが混じる場合があることに注意
　→　同時に残された実例が多数あれば「同時性」はより確かなものとなる。

ｃ：古いものが混じる実例にも意味がある場合がある。

#### ②．古いものと新しいものの順序が分かる＝「層位」

ａ：**なぜ，過去のモノが土の中に埋もれるのか？　【２】**

・過去の地面・場を埋没させる自然現象と人為活動

・人の活動の蓄積で埋もれていく

**b：「地層累重の法則」（地質学）の応用**

・自然に堆積した「地層」の重なりでは，下の「地層」が古く上の「地層」が新しい。
→「基本的に」下の「土層」にあるモノが古く，上の「土層」にあるモノが新しい。
＊隣接地にある古いモノが紛れ込む可能性は考慮する必要がある。

c：遺跡内で重なる土層の上下に数値年代を与えることもできる。　**【３】**

・二種類の数値年代：　暦年代と理化学的年代

**③．層位の応用：**　人間の構築物が重なる場合＝**「切り合い」**　**【４・５】**

・遺跡内で，二つの遺構が重なる（重複する）場合，その二つには必ず前後がある。
・しかも，そこには，古い遺構が埋没する過程（時間）も介在する。

**（２）誰が？：　名前を付ける＝分類する　【６】**

**①．狭い地域の中で，「一括資料」と「層位」の確認を繰り返すと，遺物の特徴のまとまり**が見えてくる。これを，**ある地域の，ある時期の標準**とする。土器の場合はこれを**「土器型式」と呼ぶ。**

**②．同じ作業を各地で行う**と，地域ごとの対比や相関が描ける。

**（３）どこに？：　どこの遺跡で？　遺跡・遺構のなかのどこに？**

＊以上のことは，各地で発見される遺物・遺構の年代判別や相互関係を考える標準をつくる作業だが，実際には各遺跡の個別の事例に注目して議論を組み上げることも行う。

・事例１：藤原京跡（奈良県）の土坑内で発見された富本銭・水晶内蔵須恵器　**【７】**
（参考）富本銭＝和同開珎に先行して発行された日本最初の方孔円形の銭貨。

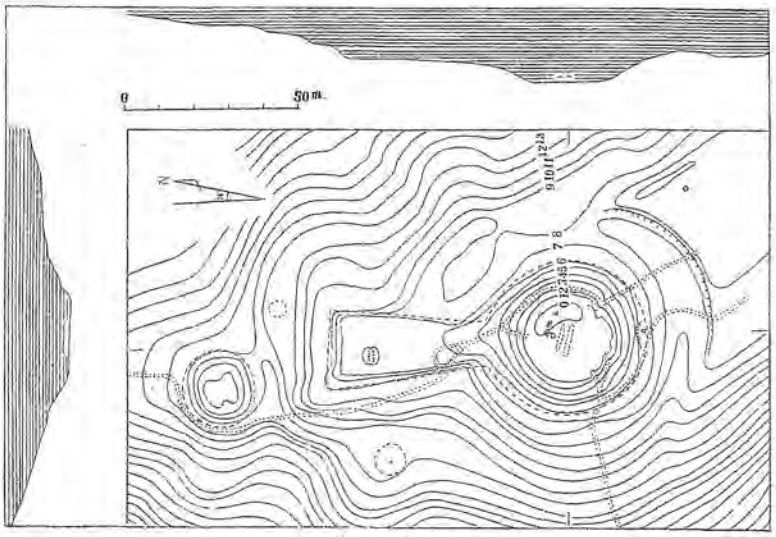
・事例２：山田水呑遺跡（千葉県）の竈（かまど）袖から出土した刀子　**【７】**
（参考）竈＝住居に設けられた炊飯施設。袖＝竈の本体部分。刀子＝携行ナイフ。

・事例３：雪野山古墳（滋賀県）の埋葬施設で出土した銅鏡（三角縁神獣鏡と倣製鏡）　**【８】**
（参考）三角縁神獣鏡＝魏の銅鏡。倣製鏡＝後漢鏡を倭国で模倣製作した銅鏡。

・事例４：　竪穴住居とそこから出土した土器群の関係　**【９】**

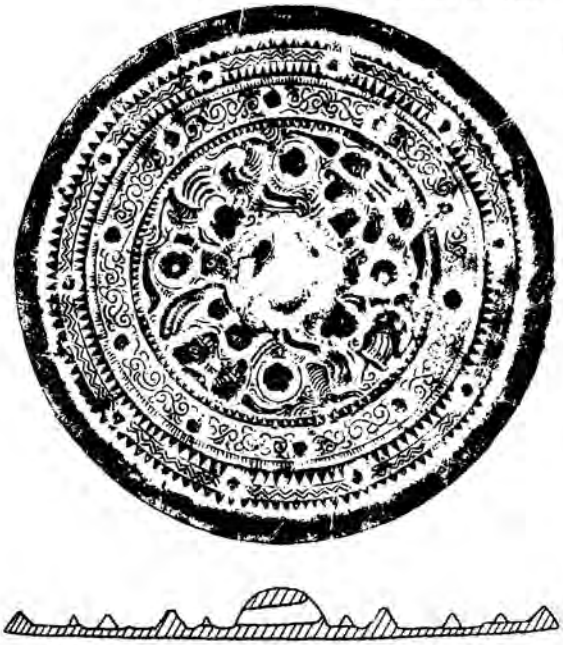
**３．結論**

＊もっとも重要なのは，遺跡内に残された，遺物と遺物，遺物と遺構，遺構と遺跡の関係を把握し，それを誰もが確認できる記録に残すこと。
発掘は，事件・事故の現場検証と酷似する。現場検証は記録がないと証拠能力はない。




墳丘全長 114m

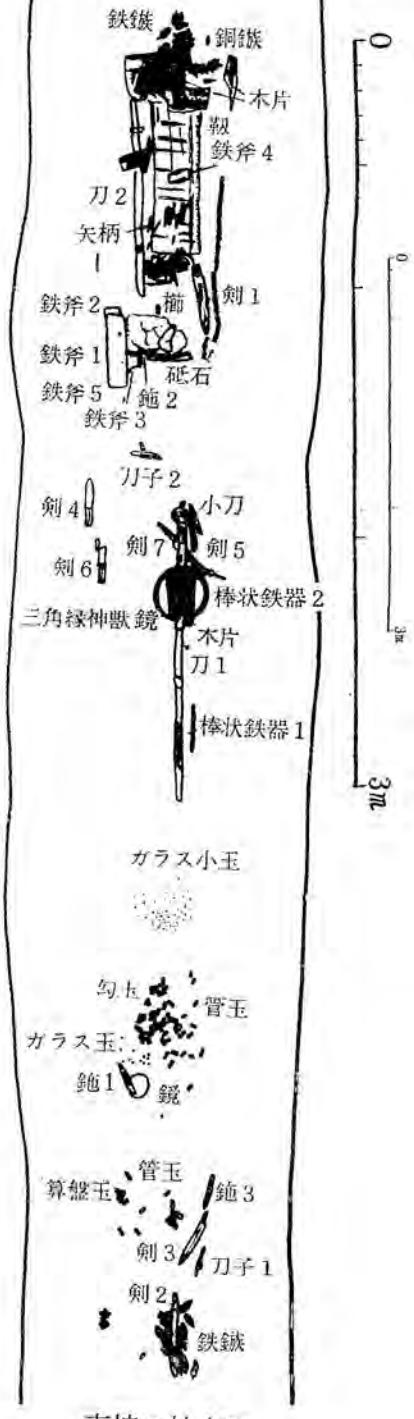
後円部に南北２基の木棺



銅鏡１（仿製三角縁神獣鏡：径 21.4cm）

銅鏡２（変形四獣鏡：径 9.5 cm）

鉄刀（素環頭大刀：長 79.3 cm）



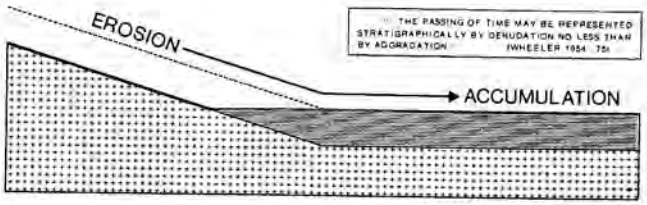

南棺の拡大図

南棺の全形

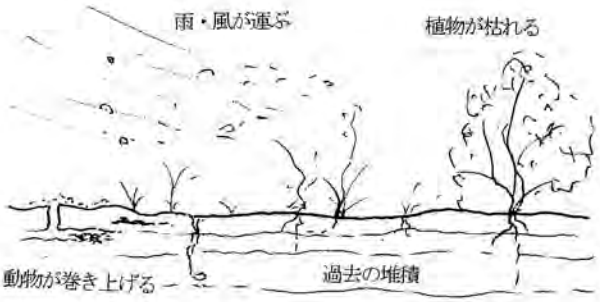
**遺物・遺構・遺跡**

**会津大塚山古墳（会津若松市）**

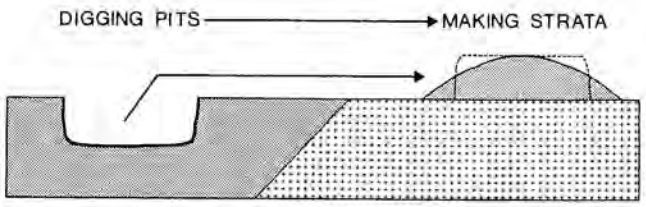
（『会津若松史 別巻１ 会津大塚山古墳』1964 年）




A１：斜面が浸食されて下流に堆積する



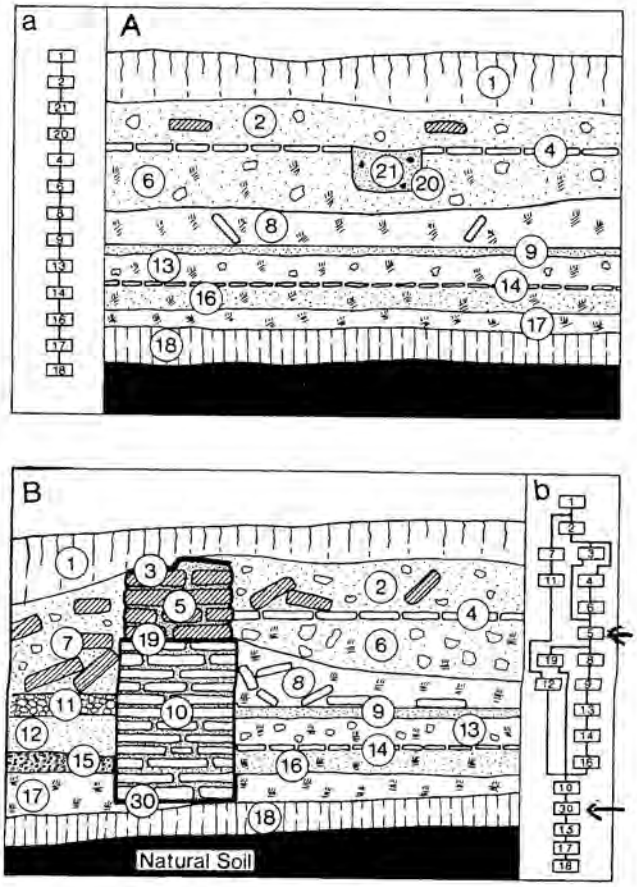

A２：平坦地でも堆積は起こる　(石川図)

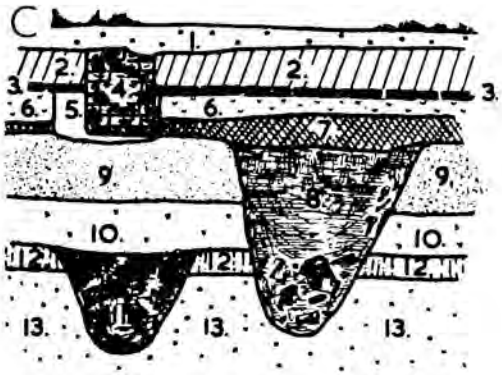



A３：遺跡では人為的に土地が掘られ，堆積（層）をつくる

## 地層・土層の堆積が起こるメカニズム

(Edward C. Harris 1979 *Principles of Archaeological Stratigraphy*, Academic Press)



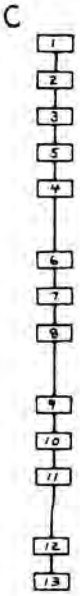

Specimen section through soil strata of a frequently inhabited site.

KEY

1. Modern top soil.
2. Debris from seventeenth century building destroyed by fire.
3. Tile floors of burnt house.
4. Foundation of internal house wall.
5. Building trench for wall.
6. Sixteenth century made soil.
7. Made soil containing fifteenth century potsherds.
8. Fourteenth century rubbish pit.
9. Late Saxon or early mediæval accumulated soil.
10. Third to fourth century Roman levels.
11. Second century Roman rubbish pit.
12. Soil disturbed during first century inhabitation.
13. Natural gravel.

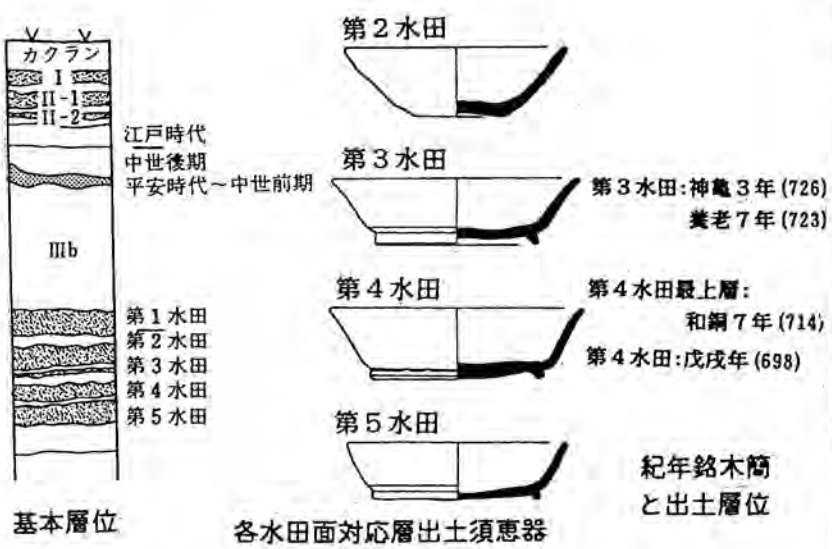
Scale: ½ inch—1 foot.

(Hume, I. N. 1953. Archaeology in Britain, Fig. 1)




## 遺跡のなかの層位

(Edward C. Harris 1979 *Principles of Archaeological Stratigraphy*, Academic Press)




長野県屋代遺跡群の層位・須恵器の型式変化・紀年木簡

紀年銘木簡

九〇 ・「船山郷井於里戸主生王マ小萬戸口 ・「 養老七年十月 三〇

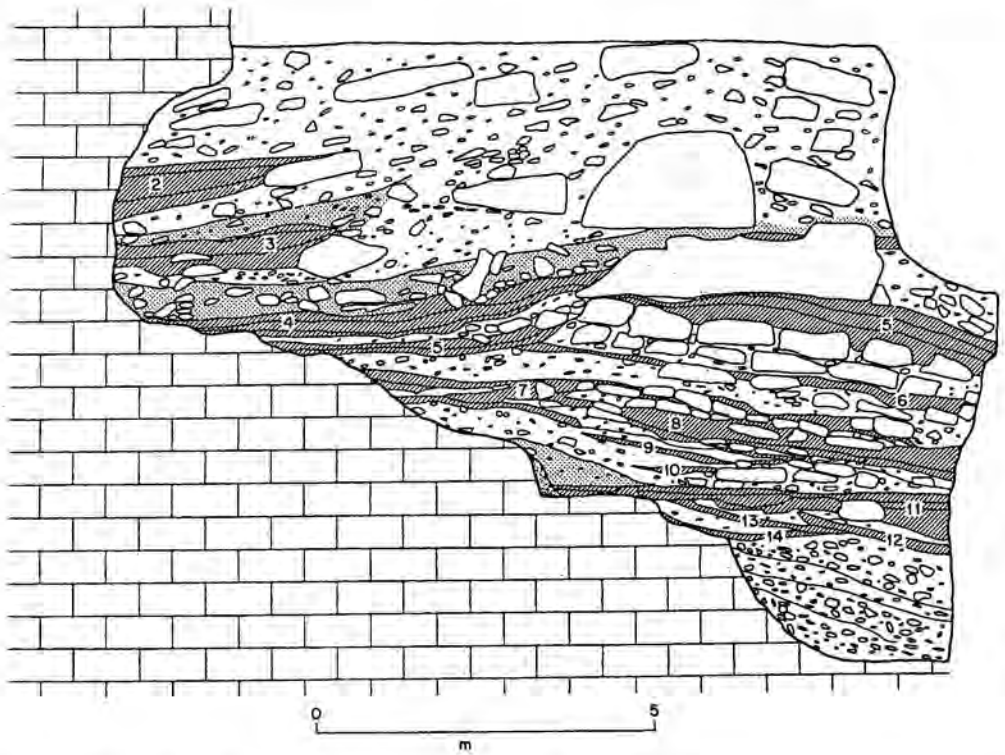



*Fig. 2.24 A section through the deposits at the Abri Pataud. The numbers refer to the stratigraphical levels that were recognized by the excavators and which contain artifacts and hearths (after Movius, 1977). The sequence is as follows:*

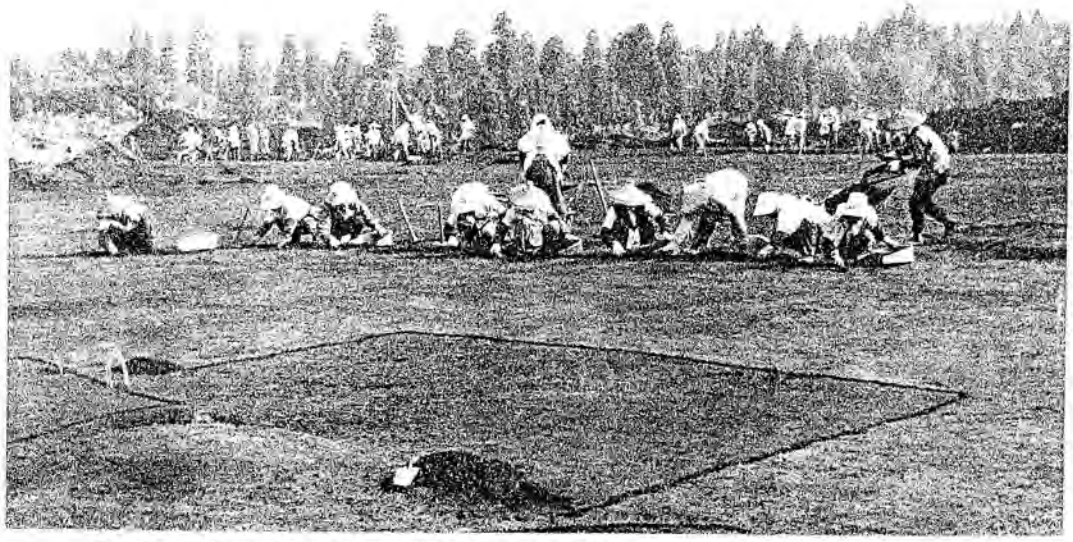
| | | | |
|---|---|---|---|
| level 2 | Proto-magdalenian | | 21 940 BP ± 250 |
| 3 | Perigordian VI | | 23 010 BP ± 170 |
| 4 | Perigordian Vc | | 27 060 BP ± 370 |
| 5 | Perigordian IV | front c. | 29 000 BP |
| | | rear | 27 900 BP ± 260 |
| 6 | Evolved aurignacian | c. | 32 000 BP |
| 7 | Intermediate aurignacian | | 32 8000 BP ± 500 |
| 8, 9, 10 | Intermediate aurignacian | | no date |
| 11 | Early aurignacian | | 32 600 BP ± 800 |
| 12 | Basal aurignacian | | 33 260 BP ± 500 |
| 13 | Basal aurignacian | | no date |
| 14 | Basal aurignacian | | 34 000 BP ± 675 |

<層位と編年>

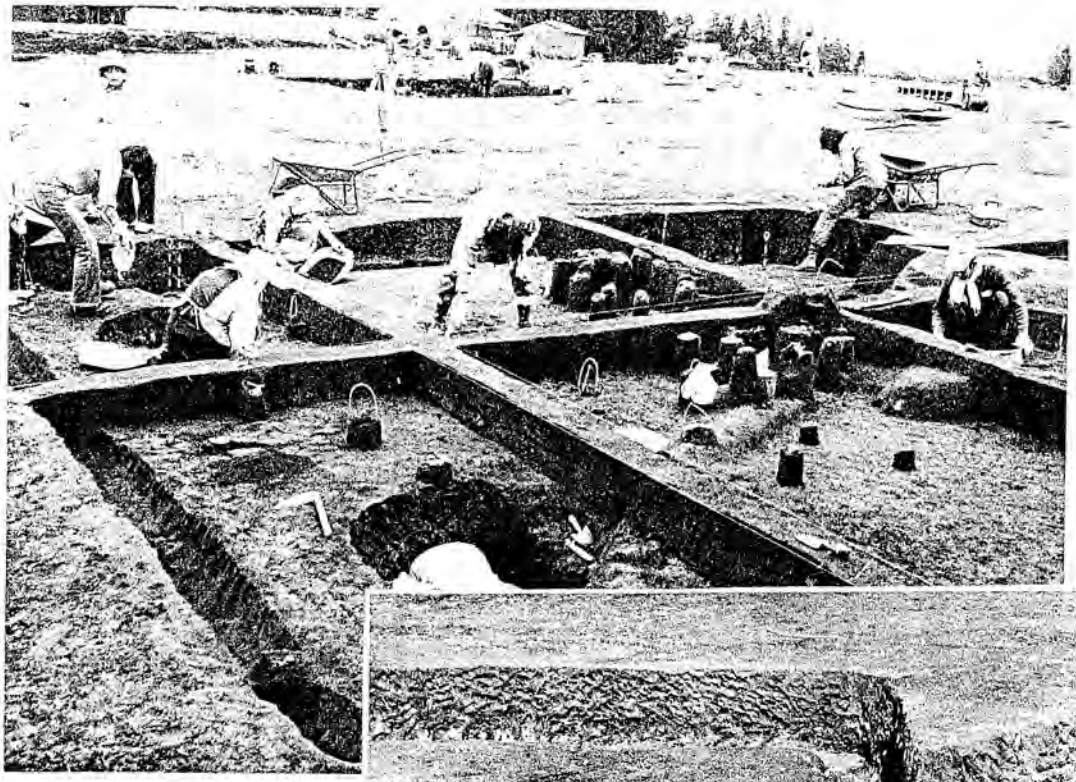
フランス:アブリ・パトー洞窟の層位と放射性炭素年代測定値

(T.Champion et.al 1984 *Prehistoric Europe*)

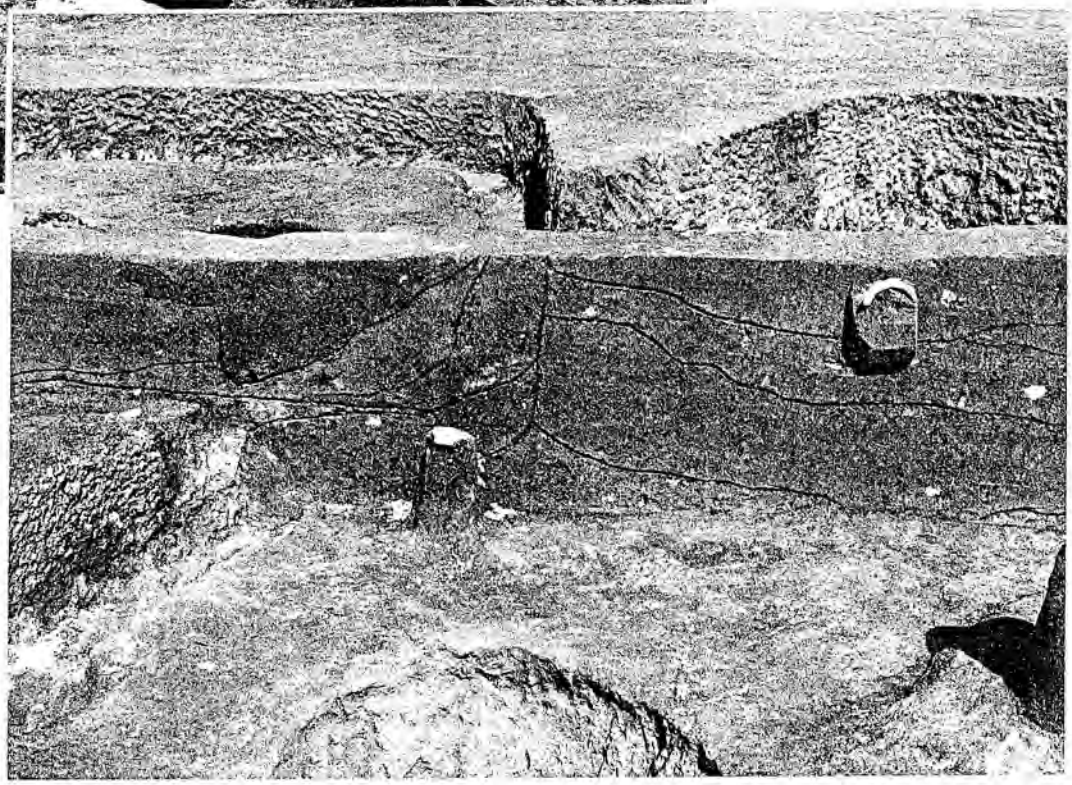
# 竪穴住居の発掘（千葉県東金市山田水呑遺跡：奈良・平安時代）

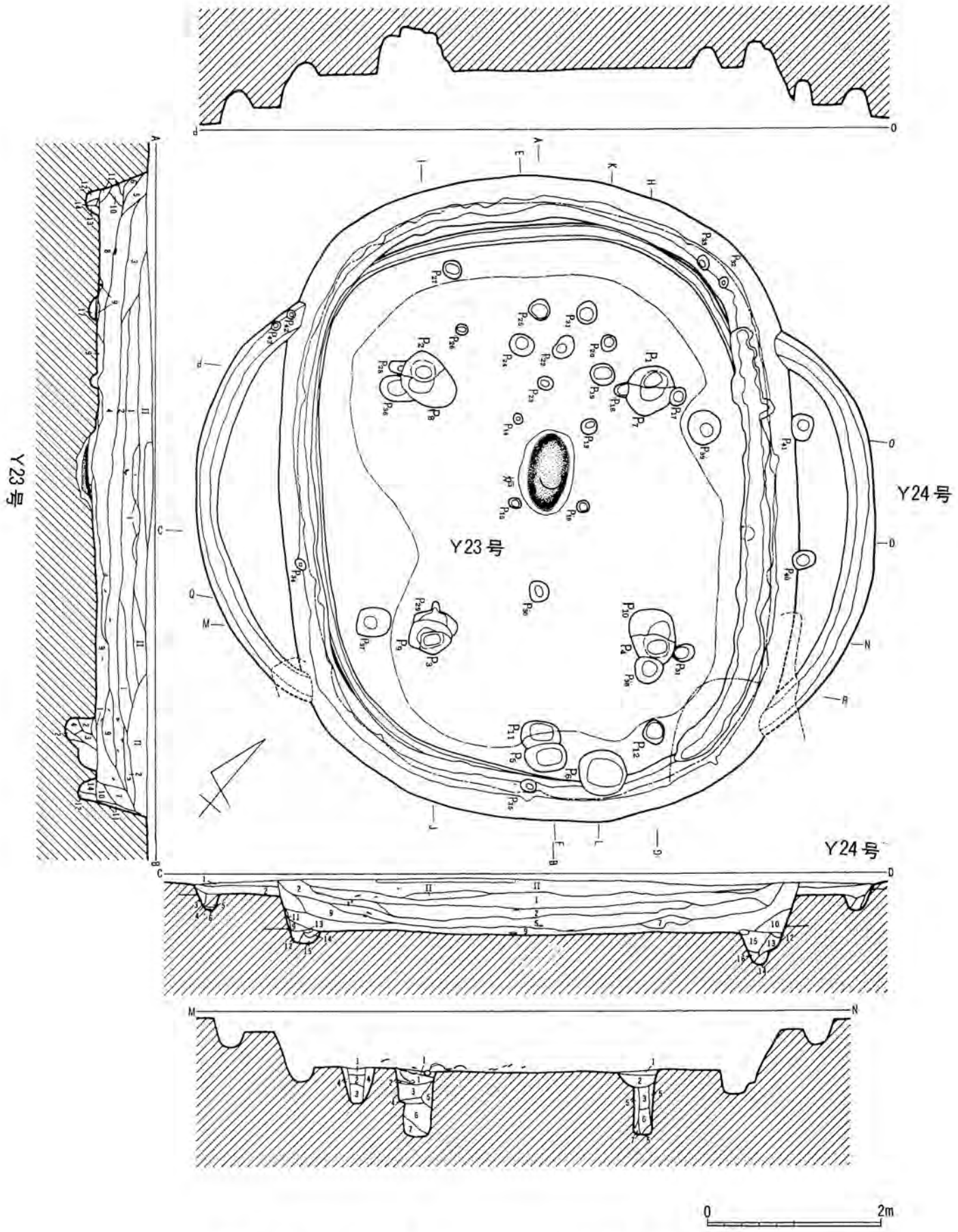


発掘調査風景　遺構落込確認調査



発掘調査風景
住居址覆土の分層作業





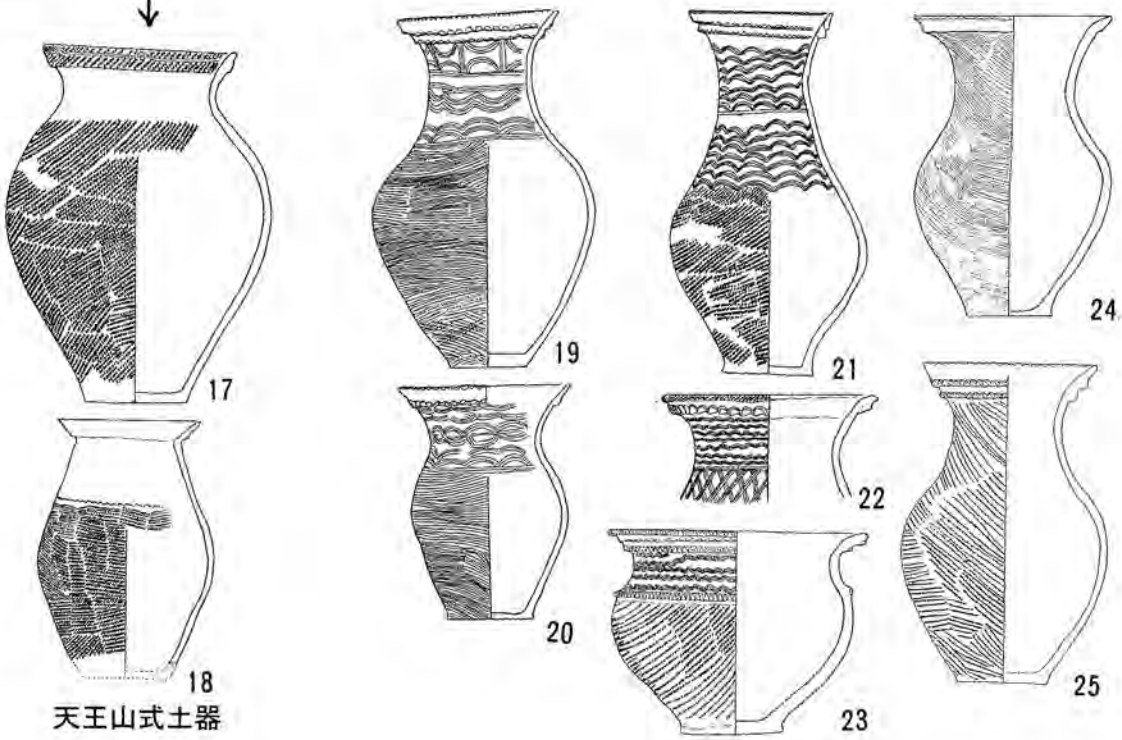

竪穴住居の重複と拡張（横浜市大塚・歳勝土遺跡：弥生時代）

白河市天王山遺跡

天王山式土器

東中根式土器

ひたちなか市東中根遺跡




天王山式土器

東中根式土器

名づける＝（土器）型式

各地の遺跡で一括遺物や層位を比較検討して，地域と時期を見分ける「型式」を定める

（上：『弥生式土器集成資料編１』1958 年，下：『勝田市史資料編別編Ⅱ』1979 年）

朝日新聞　2007年(平成19年)11月30日

## 藤原宮跡

# 最古の地鎮祭

## 道具の貨幣・水晶入りつぼ出土

日本最初の都城の中枢、藤原宮跡（奈良県橿原市、694～710）で、最古の貨幣の富本銭と水晶を入れたつぼが出土し、奈良文化財研究所が29日、発表した。宮殿建設の無事を祈る地鎮の道具とみられる。周囲に四つの柱穴もあった。宮殿の地鎮跡としては最古といい、日本書紀の記述にも一致する。同研究所は、四隅に青竹を立てるなどする現代の地鎮祭のルーツだろうとしている。

天皇が執務した大極殿を取り囲む回廊跡で見つかった。柱穴は周囲約1キロ四方。つぼを囲むように造った仮の施設で地鎮祭をしたらしい。

つぼは、ラッパ状の口がついた須恵器の平瓶（直径約20センチ、高さ約14センチ）。この口を数枚の銅銭や土がふさいでいたため、X線コンピューター断層撮影（CT）装置で内部を透視・分析した。その結果、口にあったのは富本銭9枚で、本体内には六角柱状の水晶9個があるとわかった。

同研究所の松村恵司・考古第一研究室長は「国家による地鎮の実態が明確になった。この時の儀式が後の地鎮祭の起源ではないか」と話す。

◇

現代日本では、9は「苦」として嫌われることもあるが、中国では「永久」の「久」と同じ発音のため、縁起のいい数字という。陰陽道でも9は陽数（奇数）の極（最高の数字）とされる。森郁夫・帝塚山大学教授（歴史考古学）は「9という数が重なりあっていることからみても、この地鎮祭は陰陽道に従って執行されたのではないか」とみる。

栄原永遠男・大阪市立大学院教授（日本古代史）は「土地の神に多くの宝物を献ずる、ということだったのでは」と話している。

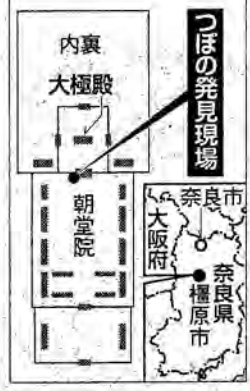
ただ、水晶や貨銭を地鎮に用いることは「陀羅尼集経」などの仏教経典にも登場する。同研究所は「最古の宮殿地鎮祭は、仏教や道教、陰陽道など様々な要素が混在していたのだろう」と推測している。

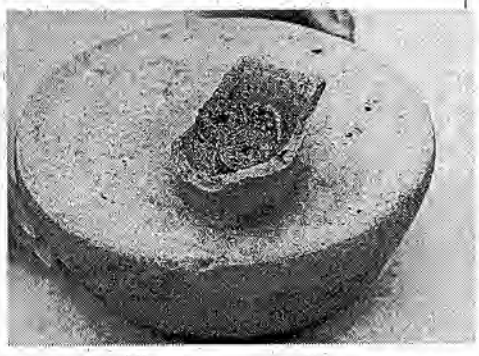
（渡義人）

The Asahi Shimbun

藤原宮の復元図

想定される建物の位置

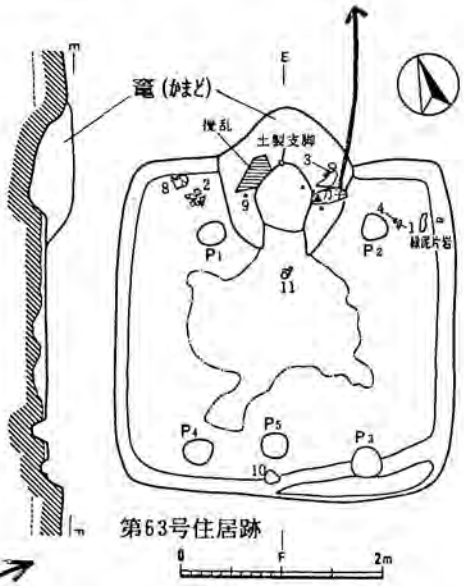


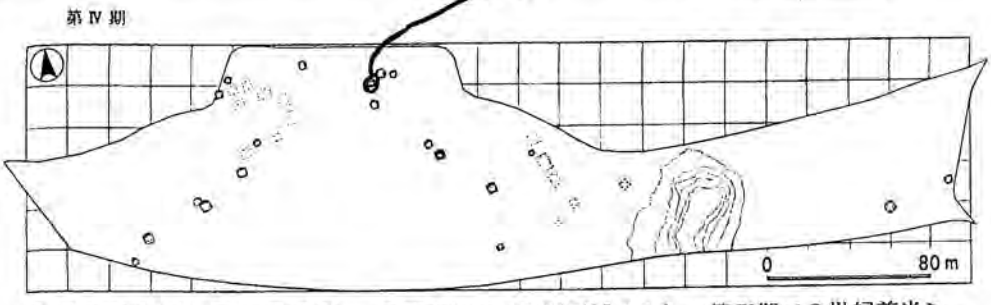
ラッパ状の口に富本銭が9枚あった＝29日、奈良県橿原市で、青山芳久撮影

讀賣新聞　2007年(平成19年)11月30日（金曜日）

富本銭　最古の貨幣で、日本書紀に683年、「今より以後、必ず銅銭を用いよ」と記された銅銭にあたる。1998年、奈良県明日香村の飛鳥池遺跡で大量の未完成品や失敗作、鋳造跡が見つかった。




A 「地鎮具」という判断

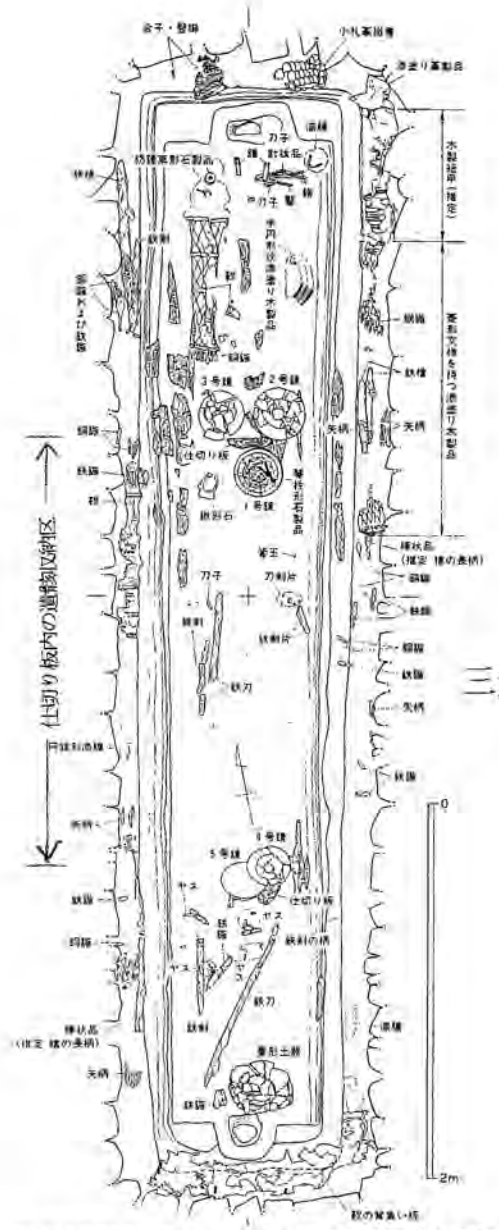



千葉県東金市山田水呑遺跡　集落全体図（発掘区域のみ）：第Ⅳ期＜9世紀前半＞

B 単なる刀子（ナイフ）ではない

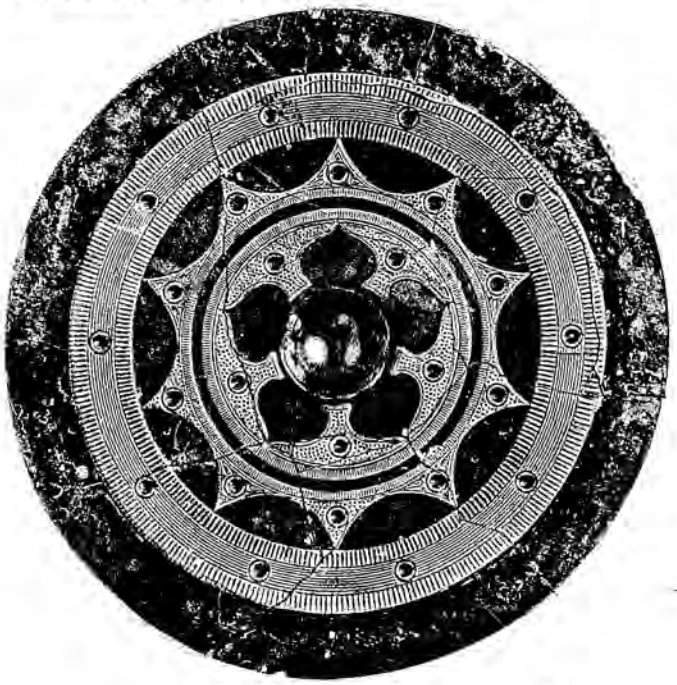
（山田水呑遺跡調査会 1977『山田水呑遺跡』より作成）

発掘：遺跡での「状況 context」が重要（1）

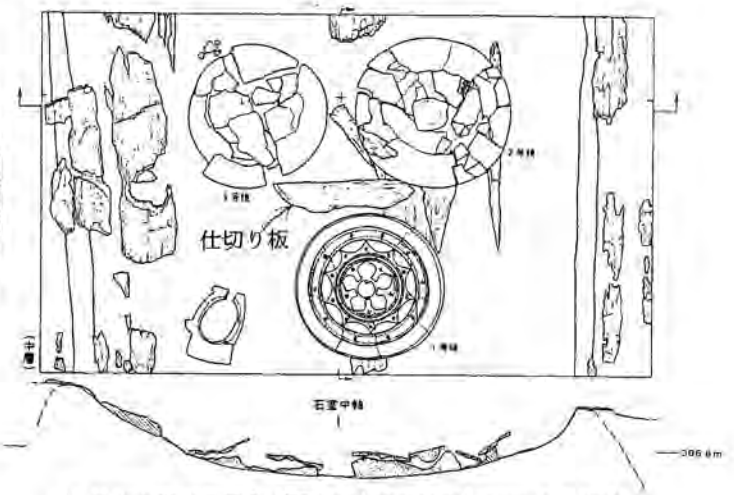


三角縁波文帯盤龍鏡
（３号鏡）

三角縁神獣鏡とよりも倣製鏡が優位の扱い



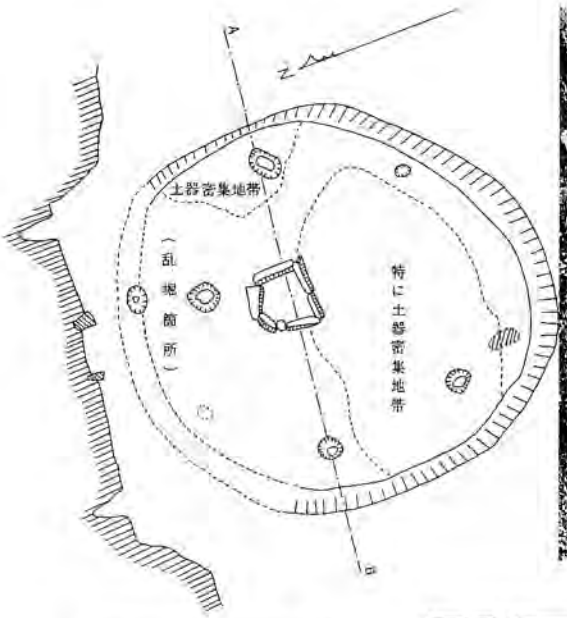
内行花文鏡（１号鏡）




鼉龍鏡
（２号鏡）

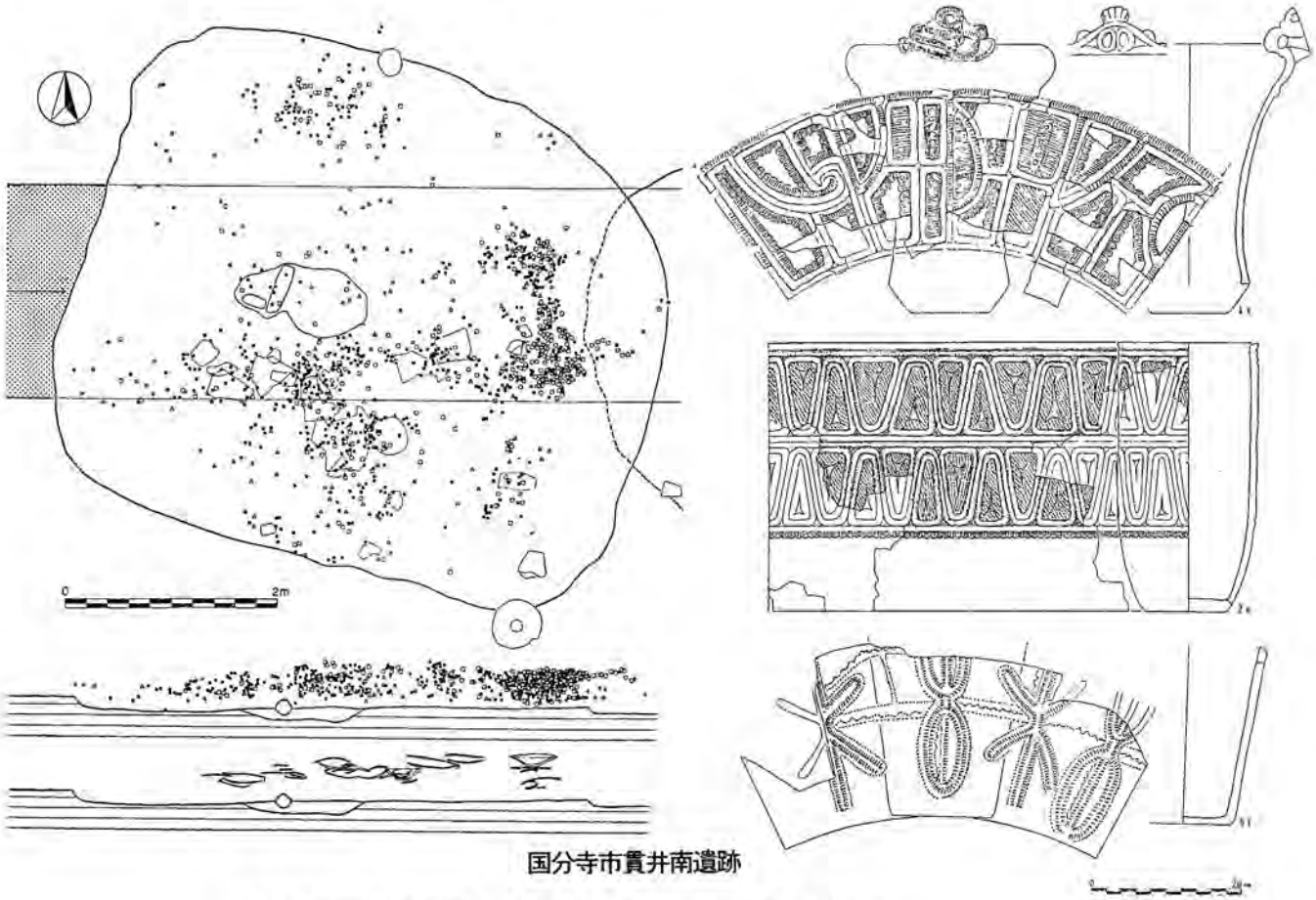
（八日市市教育委員会『雪野山古墳の研究』1996 より作成）

**発掘：遺跡での「状況 context」が重要（２）**



竪穴住居址の全貌（最初に清掃したところ）

山梨県重郎原遺跡



国分寺市貫井南遺跡

竪穴住居から多量の土器が出たとしても意味が違う！

床面の土器と埋め土中の土器